



サシバの里自然学校のベースキャンプ。この雰囲気に加え、広間に土間に外トイレといった作りも体験活動に使い勝手がよさそうです。



# “愛すべき小さな田舎” からの小さなたより

第21回

## サシバの里、訪問

星ふる学校「くまの木」(栃木県塩谷郡塩谷町)  
[特定非営利活動法人 くまの木 里の暮らし]

加納 麻紀子

### 庭

先に羽毛がふわふわ舞っていて、散歩に連れて出た犬がくんくんにおいをかいでいる。三〇cmを超える羽(翼)が落ちていた。羽ペンのような一本の「羽根」が落ちていたのは珍しくないが、こんなふうにとさつと落ちていた羽(翼)を見るのは初めて。何の羽? どういうこと? こんなときは写真撮ってフェイスブックに投稿する。するとほどなく生き物に詳しい(いや、中にはまさにその分野の専門家である)「友達」が情報をくれる。羽の主はおそらくフクロウで、オオタカなどのほかの猛禽類に襲われたのだろうということ。おお、『野生の王国』で見

るようなシーンが我が家の庭先で!? 生態系ピラミッドの上位種である猛禽類の存在をこんなに身近に感じられる環境が誇らしい。ちなみにわたしは、田んぼまわりにあたり前にいる鳥たちの姿も好きだ。田んぼ脇の道を悠々と歩くキジヤ、すくくと背の高いサギヤ、田んぼの中をすいすい泳ぐカルガモたちもみんなどこか愛嬌があつて親しみ深い。ツバメの子育ては毎年見ても見飽きない。

県内に「里山の猛禽」と言われるサシバをシンボルにまちづくりを進めている自治体がある。栃木県東部、芳賀郡にある市貝町。町の一部は八溝山系から続く丘陵地で、谷津田が広がる。二〇〇〇年頃、ここが日本でも有数のサシバの繁殖地であることが明らかになり、栃木県内で猛禽類の調査・保護活動に取り組みNPO法人オオタカ保護基金が継続的に調査を行うようになった。巣づくり、狩り、子育てというサシバの営みに適した環境は雑木林と田んぼが近い昔ながらの里山

### サシバの里自然学校 生きものマップ



サシバの里自然学校生きものマップ  
(NPO法人オオタカ保護基金サシバの里自然学校)

だが、今の時代の流れに委ねるとその環境の維持はなかなか難しい。サシバの舞う美しい里地里山はほかにない市貝町の宝でもある。そしてこうした環境は一度失われると再び取り戻すことは困難だ。二〇一〇年にオオタカ保護基金と市貝町が協働してサシバをシンボルにしたまちづくりに取り組み始め、二〇一三年度に町は「サシバの里づくり基本構想」を策定、里山環境の保全と地域経済の両立を目指し、各種事業を進めている。

人口約一、〇〇〇人で小学校三校、中学校一校という町の規模、豊かな里山の自然が町の魅力であることなど、なんとなーく塩谷町と共通するところあるか



古民家の脇からの道。雑木林もすっきりと風通しよく、とても清々しい。それにしても、どこへ行っても草刈りのことばかり気になってしまうのは悲しい性というか、「農村あるある」というか…。

このエリアには約1反歩の田んぼが4枚。一番上には水神様を祀ったため池があり、水を温める“テビ”は生き物の宝庫。「いいなあ、これはうらやましい!」。でも、隣の芝生ならぬ、隣の田んぼは緑、なのですよ。



も……と気になりながらなかなか訪ねる機会がなかったのだが、先日くまの木のスタッフが市貝町の「サシバの里自然学校」にキャンプファイヤー用の薪をもらいに行くと言ったので、じゃあ、わたしも！とくっついて行った。二〇一六年にオオタカ保護基金を母体として開設されたサシバの里自然学校とは、説明すると長くなるあれやこれやでくまの木とは旧知なのだ。市貝町を訪ねるならまずここ、と思っていた。校長でアウトドア・農担当の遠藤隼くんは、日本屈指の自然学校であるホールアース自然学校でツアーやキャンプを担当し、その後自転車での地球一周旅を完遂した猛者なのだが、そんな猛者感を出してこないところが本当の猛者だとわたしはひそかに思っている。「能あるタ

力は爪を隠す」である（やっぱり猛禽！）。

サシバの里自然学校のフィールドは、築一五〇年の古民家とその周囲の雑木林、谷津田、畑の一带なのだ。道の駅「サシバの里いちがい」にほど近く、きれいに整備された県道からちよつと細い道に入るだけでこんな環境が!?とちよつとびつくりした。古民家まわりで迎えてくれる犬とヤギとウサギのほかにも、里山のたくさんの生きものがあることはすぐに感じ取ることができる。ピククイー！ピククイー！と早速サシバの鳴き声も聞こえてきた（さすがサシバの里！）と言ったら「これはケンカ。普段はこんなに鳴かないですよ」とのこと。主催事業としての、農的暮らしや里山の生きものをテーマにした体験プログラム、加えてサシバの里協議会のエコツアーなどにも協力しており、ほぼ週末ごとに宇都宮市などから一回一五〜二〇人ほどの親子などがやってきていたのだそう。わくわく感とくつろいだ雰囲気同居していて、リピート参加の固定客があるというのがよくわかる。また、保育園や小学校といった単位での自然体験も受け入れているという。ちなみにこの自然学校の生き物担当は、オオタカ保護基金の代表である遠藤孝一さんで、孝一さんと隼くんは親子だ。

薪がある場所へ案内してもらいに古民家の脇から山に入っていく。この面積の手入れは大変そうだなあと思うが、山の作業には学生も参加しているとのこと。人手があっても刈払機じゃないと仕事にならないでしょ、と言ったら、講習もセットにして刈払機でガツツリやっってもらうという。さすが。刈払機の作業、結

構みんなやりたがりですよ、とのこと。きれいな雑木林が本当に気持ちいい。このまま山の中に入っていくのかと思ったら、目の前に田んぼが現れた。狭い谷筋にあるまさに谷津田。思わず、わぁ！と声をあげてしまう。秘密の田んぼと言ってもいいロケーションがすてきた。耕作されていなかった田んぼは、たくさん親子や生き物が訪れ、サシバ米を育てる場として復活した。生き物遊び、自由遊び、農作業どれも好きないように楽しめるさりげないレイアウトもこれまたさすがである。農山村という意味では同じようなところで同じような仕事をしているけれど、いや〜、ここ、いつまでもいられるなあ……とすっかりのんびりしてしまった。里山の包容力のなせるワザか。サシバの里ってこんなところだよ、というのが子どもから大人まで誰でも実際に肌で感じられるところだ。生き物をシンボルにしたまちづくりのひとつの実態があると言ったらいいだろうか。その場とプログラムがあるのはすばらしい。

くまの木に戻りトンビやサシバの空高く通る声を聞きながら、市貝町に思いを馳せながら、またひとつ、愛すべき小さな田舎に出会えた。

サシバの里に行ったのにヤギ談議で盛り上がり、ニワトリの魅力に取りつかれる。野生動物とはまた違った切り口だけれど、長らく人間と生活を共にしてきた動物を通して得られるもの、学ぶことも大きい。なんといっても単純にかわいい!

